群教セ	F09 － 01
	平21.241集

授業に生かす好ましい人間関係の育成

―「聴く」「話す」に視点をおいた「ふれあいプログラム」と「振り返りカード」を通して ―

長期研修員　　新井　信男

《研究の概要》

本研究は、中学校学級活動や教科、帰りの会において、「聴く」「話す」に視点をおいた活動を行い、生徒が人とのかかわりから様々なことを学び高め合うことができる「好ましい人間関係」を築くための実践研究である。目的と実態に合わせた活動を通して、生徒同士の人間関係を築く。その人間関係を生かし、授業場面において人とのかかわりから学ぶことを目指した学級経営のための実践プログラムである。

キーワード　【好ましい人間関係　「聴く」「話す」　かかわりから学ぶ　中学校】

Ⅰ　主題設定の理由

OECD はプログラム「コンピテンシーの定義と選択」（DeSeCo）を1997年末にスタートさせ、2003年の最終報告では、鍵となる能力概念の一つに「多様な社会グループにおける人間関係形成能力（自己と他者との相互関係）」を挙げた。具体的には、「他人と円滑に人間関係を構築する能力・コミュニケーション能力としての『生きる力』」である。また、群馬県教育委員会も平成21年度学校教育の指針において、特別活動では「よりよい生活や人間関係を形成する力の育成」、生徒指導では「よりよい人間関係を築く力の育成」を、指導の重点としている。しかし、現状に目を向けてみると、学校生活の様々な場面でコミュニケーション能力の低さを感じる。

協力校においても、生徒の問題行動の背景や要因を考えた時、その一つとして人間関係の希薄化が挙げられる。幼い頃からの経験不足から、対人関係をうまくつくることができなかったり、自己指導能力の低さから、心に悩みや不安、ストレスを抱えたりしている生徒も少なくない。その結果、人との交流を好まず、学級の中で自己肯定感を高められないため、居心地の悪さを感じる生徒も見られる。また、数学部会ではここ数年「学び合い」をキーワードに授業実践に取り組み、ある程度の成果を上げてきた。しかし、同じ課題で同じように授業を展開しても、クラスによって生徒の意見の出方に差が生じることがある。これらの問題は他教科の授業も同様であり、教科や学習の理解度という問題だけでなく、学級の人間関係に問題があるように感じる。自分の意見に自信をもてなかったり、違った意見を認め聞き入れたりする人間関係ができていないのである。これらの問題を打破するためには、生徒同士の考えや知識の交流ができる人間関係づくりが必須と考える。また、全国学力・学習状況調査の分析から、「学校で友達に会うのは楽しいと思う」生徒ほど教科での正答率が高いという傾向が見られた。このことからも、友達との人間関係が学習の意欲や態度に大きな影響を与えることが判断できる。

そこで、学級の実態を客観的に把握・分析し、その実態にあった傾聴、共感的な態度などのカウンセリング技法を活かした相互理解を深めるための活動を、「聴く」「話す」に視点をおき行っていく。活動を通し、生徒一人一人が自分を表現し、その表現したことを認め、共有することにより、考えを広げたり、お互いを高め合ったりすることができる。個人からグループ、クラス全体と場を広げ、生徒同士の考えや知識の交流から、新たな考えや知識の発見が期待できるような活動を実態から探っていきたいと考える。これらの活動が生徒のコミュニケーション能力を高め、人とのかかわりから学ぶことができる「好ましい人間関係」の育成に有効であると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

学級活動等の時間において、人とのかかわりから様々なことを学び高め合える「好ましい人間関

係」を築くために、生徒相互のかかわり合いの場となる「聴く」「話す」に視点をおいた「ふれあいプログラム」と、人とのかかわりから学ぶことの日常化を図るための「振り返りカード」の有効性を明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　「ふれあいプログラム」について

学級活動や教科の時間において、その実態や目的に合わせた「聴く」「話す」に視点をおいた「ふれあいプログラム」を計画、実践することによって、生徒一人一人がコミュニケーション能力を高め、人とのかかわりから学ぶことの大切さに気付くことができるであろう。

2　「振り返りカード」について

「振り返りカード」を通して、自分のよさを表現したり、友達のよさを見つけ認めることや、友達の意見を取り入れる体験を繰り返し行っていけば、他に関心をもち、人とのかかわりから様々な知識や考え方を学び高め合う「好ましい人間関係」を育成することができるであろう。さらに、その人間関係を授業に生かすことができるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え

(1)　「好ましい人間関係」とは

本研究において「学ぶ」とは、「好ましい人間関係」の下、生徒たちが様々なことを「人とのかかわりから学ぶ」ことであると考える。佐藤学氏は、「学び」を定義するに当たり、その一つの要素として「教師や仲間との対話の実践」ということを挙げている。このことから考えると、学校において「学ぶ」ためには、「教師や仲間との対話の実践」が存在し、対話的コミュニケーションが成立していることが必要である。また、「対話的コミュニケーションが成立している教室では、その基盤に『聴き合うかかわり』が成立している」とも言っている。「学び」は他者の声を聴くことから出発することを強調している。「聴き合うかかわり」とは、相手の発言を「聴く」そしてその聴いた内容に対して自分の思いを「話す」という繰り返しである。本研究における「聴く」とは、相手の気持ちや自分の必要な情報を読み取ること、「話す」とは、自分の気持ちや自分が活用・編集した情報を表現することと考える。「聴く」「話す」を基本としたかかわりから生徒同士の考えや知識の交流が行われ、その結果、生徒は新たな考えや知識を学ぶことができるのである。このように、人とのかかわりから学び高め合う関係を「好ましい人間関係」と定義づける（図１）。

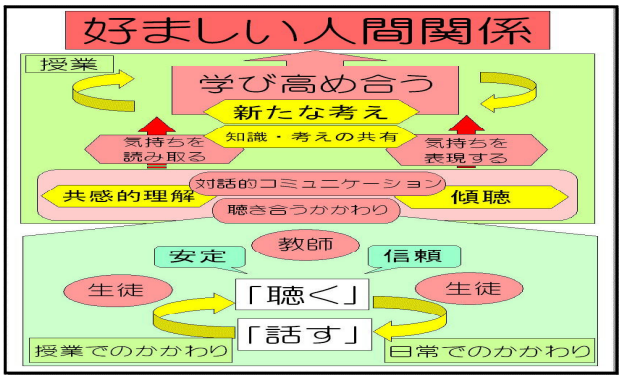


図1　好ましい人間関係

(2)　「聴く」「話す」に視点をおいた「ふれあいプログラム」について

「好ましい人間関係」を築くためには、「聴く」「話す」というスキルを身に付けることが必要である。そのため、「聴く」「話す」という行動が相手との相互作用となるための「聴き方」「話し方」の支援を探っていかなければならない。「好ましい人間関係」を築くための第一条件として、生徒相互の人間関係に信頼と安定が備わっていることが大切である。その上で、生徒相互のコミュニケーションの量と質の充実を図っていく。まず生徒の実態は「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙（C&S）」（群馬県総合教育センター：平成19年度研究）（以下質問紙）を利用し、生徒一人一人の「自己肯定感」と「学級の雰囲気の認知」から調査する。自己肯定感や学級の雰囲気の認知は、学級での人間関係と密接に影響し合っている。そのため学級における生徒の現状が、この質問紙の結果に反映されやすい。このプログラムは、協力校の実態を分析し計画した。

各活動とも「聴く」「話す」に視点をおき活動を進めていくが、そのかかわり方を「事実」「気持ち」「考え・意見」と段階ごとに変えていく。最初は、単に事実だけを交流させ、その後気持ちや感情を交流させる。そして最終的には、授業において自分の考えや意見を交流させる。ステップ１として、お互いのよさを認め合うことを目標に、自己理解と他者理解を目的とする活動を行い、人

間関係の基礎づくりをする。次にステップ２として、相手の情報をよく聴き、自分の情報と比べながら、協力して課題を解決するグループ活動を行う。情報を媒介とした対話的コミュニケーションを通し、心のふれあいを深め、情報活用能力・情報編集能力を育成すると同時に、「聴き合うかかわり」を身に付けさせたい。導入では、カウンセリングの技法である傾聴、共感的態度なども指導する。ステップ３として、人とかかわるなかで学ぶことを経験させる。お互いの考えや意見を聴き合う活動を通して、共感的態度を育てていきたい。そしてステップ４として、ステップ１～３の活動を授業で生かすために数学の授業を行う。生徒相互の人間関係を有効に活用し、情報である数学の知識・技能を媒介とした対話的コミュニケーションを通して課題を解決させる。また、それぞれの学習過程において、学習成果を共有できる共感的態度を基本姿勢とし学習を進めていく。友達の考えも自分の考えとすることができたり、友達から教えてもらうことによりお互いに考えが深まったりするなど、様々な知識・考え方をかかわりながら学び高め合う姿が期待できると考える（図２）。

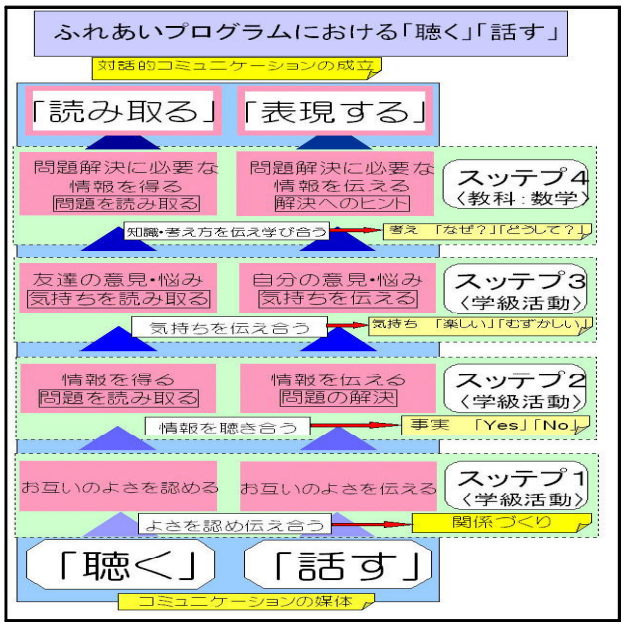


図２　「ふれあいプログラム」における「聴く」「話す」

(3)　「授業に生かす」とは

授業においては、まず課題からの情報を基に、自分の意見や考えを明確にし表現する（話す）。それらの意見や考えを、お互いに読み取り（聴く）伝え合うことから、考えや意見を共有したり、新たな考えや知識、問題に対するヒントなどを得たりする。この時、自分の意見や考えに自信がもてず、表現できないようなつぶやきにも、生徒同士で耳を傾け合い意見として吸い上げる。また、たとえ自力解決できなかったとしても、友達の様子を見ながら、模擬的に学習し自分の出来具合を振り返り、さらに学びとしていく。教師が課題や発問の工夫、一斉学習やグループ学習などの効果的な授業形態の工夫、考えの交流場面の設定などを行うことができれば、生徒は好ましい人間関係を授業に生かしていけるものと考える。このような生徒の関係を「授業に生かす好ましい人間関係」ととらえる。

(4)　「振り返りカード」について

「人とのかかわりから学ぶ」ことの日常化を図るため、帰りの会に「振り返りカード」の記入を行う。ステップ１～４の活動を振り返ると同時に、「人とのかかわりから学ぶ」ことを「自分のよさを発揮する」「相手のよさを見つける」「お互いのよさを高める」という三つの観点から意識させたいと考える。また、カードに記入をすることにより、自他のよさを認め合うことから、好ましい人間関係を育成できると考える。日常生活における人間関係が、授業場面に大きな影響を与える。「人のふり見て我がふり直せ」をキーワードに、クラス全体でそれぞれのよさを認め合い、学び高め合おうとする意識を喚起したい。

2　研究構想図

本研究の研究構想図を図３に示す。

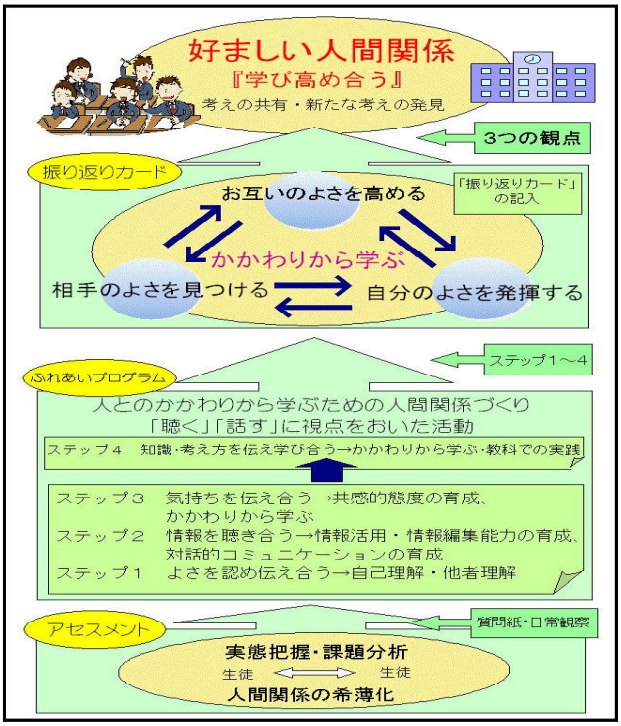


図３　研究構想図

3　実施計画

対　象	実　施　期　間	時　　間
中学校第１学年(34名)	平成21年10月	○学級活動　３時間・数学　１時間　○帰りの会　５日間

4　検証計画

研究仮説	検証の観点	検証の方法
見通し１　『ふれあいプログラム』について		
学級活動等の時間において、その実態や目的に合わせた「聴く」「話す」に視点をおいた「ふれあいプログラム」を計画、実践することによって、生徒一人一人がコミュニケーション能力を高め、人とのかかわりから学ぶことの大切さに気付くことができるであろう。	学級活動等の時間において、コミュニケーションの基本である「聴く」「話す」に視点をおいた活動により、お互いを理解し合ったり、考えや意見の交流を行ったりしたことは、人とのかかわりから学ぶことの大切さに気付くために有効であったか。	活動の観察 ワークシート 質問紙 担任･各教科担当のアンケート
見通し２　『振り返りカード』について		
「振り返りカード」を通して、自分のよさを表現したり、友達のよさを見つけ認めることや、友達の意見を取り入れる体験を繰り返し行っていけば、他に関心をもち、人とのかかわりから様々な知識や考え方を学び高め合う「好ましい人間関係」を育成することができるであろう。さらに、その人間関係を授業に生かすことができるであろう。	「人のふり見て我がふり直せ」をキーワードに、「自分のよさを発揮する」「相手のよさを見つける」「お互いのよさを高める」の三つの観点により「振り返りカード」に一日の行動を記入したことは、人とのかかわりから様々な知識や考え方を学び高め合う「好ましい人間関係」を育成するために有効であったか。	振り返りカード 活動の観察 担任･各教科担当のアンケート

Ⅴ　研究授業実践

1　指導計画

学習活動	ねらい	活動内容
【実態調査】　質問紙から、学級や生徒の実態を客観的に調査する。その調査結果と担任の日常観察を基に学級における個と集団の関係を把握し、その課題を分析する。 **【アセスメント】** 質問紙の結果から、学級としてのまとまりは不十分である。自己肯定感の高低にも差が見られる。各教科ともに授業中の発言は少なく、活発な意見交換は見られない。班や小グループでの活動では、リーダーの不在や会話不足などからうまく機能しない場面が見られる。生徒同士のコミュニケーション不足を感じる。		
『ふれあいプログラム』について		
ステップ1 学級活動Ⅰ	○よさを認め伝え合う 【自己理解･他者理解】	自分のよさと友達のよさを表す言葉を選び付せん紙に記入する。
ステップ2 学級活動Ⅱ	○情報を聴き合う 【情報活用･編集能力の育成､対話的コミュニケーションの育成】	「聴き方」「話し方」についてロールプレイを通して知る。情報カードを基に、情報をつなぎ合わせ、課題を解決する。
ステップ3 学級活動Ⅲ	○気持ちを伝え合う 【共感的態度の育成､かかわりから学ぶ】	学習の様子を振り返り、悩みについてアドバイスし合う。
ステップ4 教科授業	○知識･考え方を伝え学び合う 【かかわりから学ぶ(教科での実践)】	問題解決に必要な条件を読み取ったり、考えを交流したりして問題を解く。
『振り返りカード』について		
「振り返りカード」の記入 〔帰りの会〕	○「人とのかかわりから学ぶ」活動の日常化 人から学ぶことの意義やよさを知り、お互いに高め合う姿が日常的に見られる。	帰りの会で一日を三つの観点から振り返り、「振り返りカード」に記入する。
【事後調査】　質問紙の客観的な結果と担任の日常観察を基に、クラスの人間関係を分析する。また、担任及び教科担任からのアンケートにより、生徒同士の交流の場における学ぶ姿を観察する。		

2　実践の概要

(1)「ふれあいプログラム」について

①　学級活動１(ステップ１)「自分再発見」

ア　活動のねらい

相手のよさを見つけようとする（他者理解）と共に、自分のよさに気付く（自己理解）活動を通して、コミュニケーション能力を高め好ましい人間関係を築く。

イ　活動の内容

自分のよさと友達のよさを表す言葉を選び、それぞれ赤と黄色の付せん紙に書いていった。友達のよさを書いた付せん紙は、お互いにそのよさの理由となる具体的な場面の説明を付け加えながら貼っていった（聴く・話す）。自分のよさも相手のよさも見つけることが困難な生徒が予想されるため、たくさんのよさを表す言葉を用意し、そこから該当する言葉を選び、なるべく多くのよいところに気付けるようにした。そして「ジョハリの窓」の考え方を基に、自分のワークシートに貼られた付せん紙を４つの窓に移動させた。「ジョハリの窓」とは、自分には「【①自分も他人も知っている自分】【②自分は気付いていないが、他人が知っている自分】【③自分にはわかっているが、他人にはわからない自分】【④自分も他人も気付いていない自分】」の４つの窓があるという考え方である（図４）。この考え方を取り入れることにより、友達によさを指摘され、改めて自分のよさを認識したり、自分が気付かなかったよさにも気付いたりすることができた。そして、お互いのよさを認め合うことで、自分を理解してくれる友達が存在することのよさも感じられた。また、④は自分も友達も気付いていないよさがこれから見つかる可能性があることを伝えた。今後の自分次第で、なりたい自分になれる期待感をもつことができた。

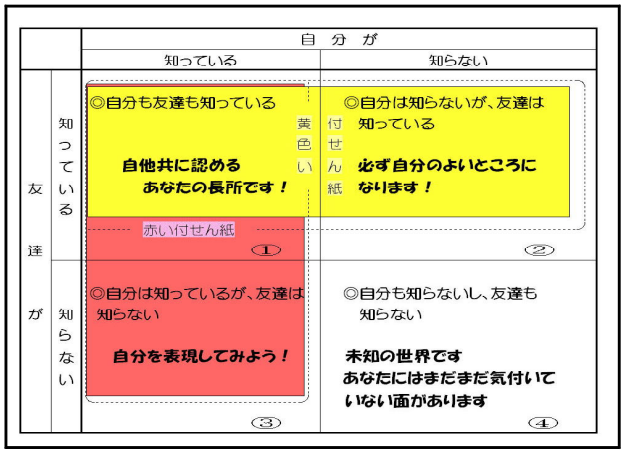


図４　「ジョハリの窓」の考え方

ウ　活動記録

〔導入〕

授業の導入では、これからの「ふれあいプログラム」でのねらいが、「友達から学ぶこと、友達の力をうまく借りること」であることを説明した。

本時の活動内容を話すとすぐに、「私こういうの苦手なんだよな」と、活動に対する抵抗感を見せる生徒（以下 A）がいた。A は活動が始まっても、自分のよさも友達のよさもなかなか書くことができなかった。その後教師の支援の下、自分のよいところを「おしゃれ」「元気」「明るい」と記入した。友達からは「明るい」「元気」という自分が挙げた言葉以外に「家庭的」「やさしい」「個性的」「正直な」「ユーモアのある」「根気強い」などが挙げられた（話す）。A は友達からよさの理由を聴いて、うれしそうな表情をしていた(聴く)。

自分が知らないことがいっぱいあった。すごくびっくりしてみんなが私のことをどんな風に思っているのかが分かったのでうれしかった。(Aの感想)

〔考察〕

A は、最初自分のよさも友達のよさも見つけられず、嫌々活動している様子が見られた。しかし、友達が A のよいところを話しながら次々に付せん紙を貼っていくと表情が変わってきた。照れながらも、とても嬉しそうであった。この友達からの言葉を通して、自分のよさを知ると同時に友達のよさも感じられたようである。そして友達との関係が今まで以上に良好になったと考えられる。

【生徒の感想から(観点別)】 ◎相手のよさや自分のよさに気付くことができる ○この学習で、自分の知らないよいところがたくさん見つかったと思う。そのよいところをこれからの学校生活でもっと生かしていきたい。 ◎友達との関係づくり(好ましい人間関係を形成する要素) ○自分が思っていたものとだいぶ違うものが出てきてなんだか意外でした。なんだか嬉しかったです。これからもこんな風に思ってもらえるようにしたいです。

〔考察〕

この活動で友達のよさや自分のよさを見つけることにより、よさを知るだけでなく、自分のよさを友達に認めてもらった喜びから、友達との人間関係をさらに良好なものにしたと考えられる。また、「ジョハリの窓」の考え方を取り入れたことにより、さらに自分のよさを伸ばそうとする意欲

が見られるようになった。図５にワークシートの例を示す。

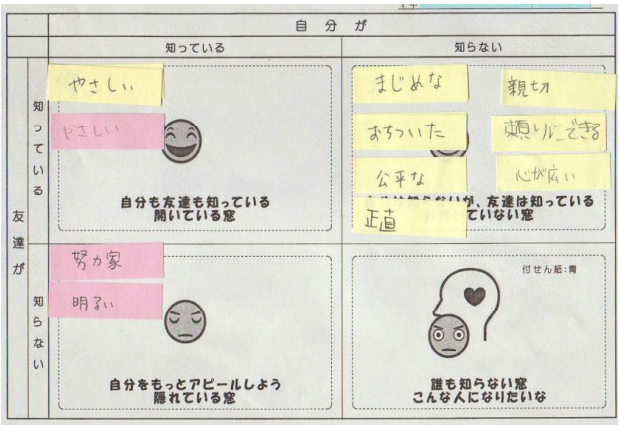


図５　「自分再発見」ワークシート

②　学級活動２（ステップ２）「教室はどこだ」

ア　活動のねらい

「聴くこと」「話すこと」について考え、傾聴の技法などから「聴く」ことの大切さに気付く。また、情報を聴き合うかかわりを通して情報活用能力、情報編集能力の育成を図ると共に、協力して課題に取り組むことで、人とのかかわりから学ぶ楽しさや意義に気付く。

イ　活動の内容

教師によるロールプレイにより、コミュニケーションの基本である「聴く」「話す」ことの重要性に気付かせた。また、「聴く」「話す」に視点をおき、情報を媒介とした正確な対話的コミュニケーションを通し、グループで協力して課題を解決するゲームを行った。グループのメンバー全員が聴き合うかかわりをもてるように、全員の情報がそろわないと解決できない課題を設定した。

ウ　活動記録

〔導入〕

最初に「聴く」「話す」ことについてのロールプレイを通し、「傾聴」の技法について説明をした。今後「聴く」とは「耳と目と心で聴くこと」を聴き方の基本とすることを指導した。

【生徒の感想から（観点別）】

◎聴き合うかかわり（「聴く」「話す」）

○普段の生活の中で、「聴く」「話す」はできているようでできていませんでした。はっきりと話し、しっかりと聴くことが大切だと言うことを改めて実感しました。これからもきちんと話をしたいと思います。

◎情報活用能力・情報編集能力の育成

○情報の中で必要なものといらないものを区別するのが難しかった。

◎協力すること・かかわりから学ぶことの意義・楽しさ

○思ったよりも大変だった。だけどみんなの情報を合わせると解決したのでみんなで協力しあうとできるものだなあと思った。

〔考察〕

ゲームを解決したいという意欲から、必然的に正確な「聴く」「話す」というコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。ゲームが進むにつれ、今まであまりかかわりがなかった友達ともコミュニケーションを図ることができた。感想から「聴く」「話す」ということの大切さや、人とかかわりながら活動することの楽しさや意義に気付いた生徒が多いことが分かる。

③　学級活動３（ステップ３）「みんなでカウンセリング」

ア　活動のねらい

活動を通して、友達と意見の交換を行うことにより、自分の考えを広げたり、新たな考えをもつことができる。また、共感的な態度でお互いのよさを認め合ったり、アドバイスを交換し合うよさに気付くことができる。

イ　活動の内容

生徒にとって関心の高い「学習」をテーマに、悩みについてアドバイスを交換し合う活動を付せん紙を使って行った。事前に、自分が学習していて効果的な方法と、逆にうまくいかない学習に関する悩みを書いた。そして、付せん紙に書いたその悩みを出し合い、自分の学習方法を基に、お互いにアドバイスを出し合った（話す）。友達の意見を聴き、自分にはなかった考えを知ったり、その考えを基に新たな考えに気付いたりすることにより、人とのかかわりから学ぶことを経験した（聴く）。

ウ　活動記録

〔導入〕

自分の考えや意見を発表することに抵抗を感じている生徒が多いため、導入で「二者択一」の活動を行った。これは、決められた２つのテーマのうちどちらか自分の好きな方を選び、その選んだ理由を発表する活動である。いろいろな考えが出されることにより、自分たちの考えが広がり、新たな考え方ができるようになることを伝え、自信をもって発表できるように働きかけた。

【生徒の感想から（観点別）】

◎気持ちを伝え合う・共感的態度

○いろいろなアドバイスがもらえたのでよかった。みんないろいろな悩みをもっているんだなと思った。これからは友

達に相談したり相談にのってあげたりしたい。

◎考えの交流・考えを広げる

○自分では気付かないこともみんなが教えてくれたのでよかったです。みんなが気付かせてくれたいろいろなことを取り入れていきたいと思います。人によって考え方はいろいろだと思いました。

〔考察〕

導入で行った「二者択一」では、答えを選んだ理由がいろいろ出され、友達の理由を真剣に聞く姿が見られた。授業後の感想でも、いろいろな理由があって楽しかったという意見が多かった。さらに自分たちでテーマをつくり、意欲的に友達とかかわろうとするグループもあった。それに対して、学習に対するアドバイスの交換では、積極的に参加できない生徒が見られた。感想から、意見の交流により具体的な学習方法について、考えを広げられた例も見られたが、「二者択一」に比べると、意見を発表することに抵抗を感じた生徒が多かったようである。授業実践前に予想されたため、学習能力に左右されない基本的な学習習慣や学習方法についての悩みが出されるよう配慮したが、それでも意見を出しづらかったようである。意図的なグループの構成や、リーダーシップをとれる生徒を育成するための手だてが必要であると感じた。

④　教科授業「数学」(ステップ4)「数学:1次方程式の利用」

ア　活動のねらい

数学の授業において、学級活動での経験を生かし、問題文から問題解決に必要な条件を読み取ることができる。また、問題解決の場面において、いろいろな考えを発表し合うことにより、自分の考えを広げ問題解決のヒントとしたり、学習内容の理解をより深めるきっかけとしたりすることができる。

ステップ１～３を授業に生かす場面

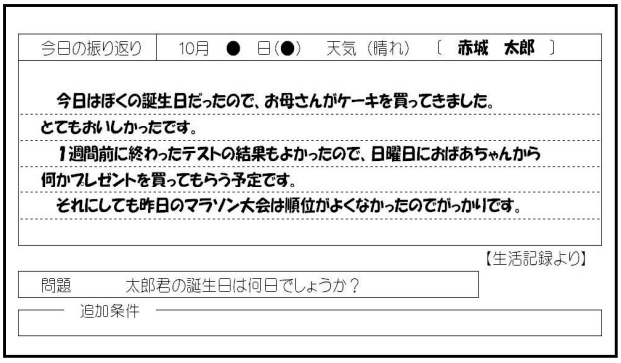
○ステップ１→お互いの考えを認め合う

○ステップ２→考えの交流・共有

○ステップ３→異なる考えを自分の学びとする

イ　活動の内容

日記の文から必要な条件を読み取り、解答を求める問題を設定した。また、より深い「聴く」「話す」のやりとりから、問題をさらに深く読み取らせるため、追加条件を必要とする問題とした（図６）。個人で考えた後グループで考えを出し合った。教科授業において、人とかかわることから学ぶことを体験させ、その楽しさや意義に気付かせた。



今日の振り返り　10月　●　日(●)　天気（晴れ）〔　赤城　太郎　〕

今日はぼくの誕生日だったので、お母さんがケーキを買ってきました。
とてもおいしかったです。
１週間前に終わったテストの結果もよかったので、日曜日におばあちゃんから
何かプレゼントを買ってもらう予定です。
それにしても昨日のマラソン大会は順位がよくなかったのでがっかりです。

【生活記録より】

問題　太郎君の誕生日は何日でしょうか？

追加条件

図６　「数学」学習プリント（問題）

ウ　活動記録

〔考察〕

◎問題を読み取る段階における「聴く」「話す」

ステップ２での活動を生かすため、問題文から必要な条件を読み取っていく問題を設定した。文章に書かれた内容を読み取り、教師の発問を待たず「マラソン大会は昨日だから･･･」「テストの日が分かればな･･･」などの発言が聞こえてきた。教師がその発言（話す）を丁寧に聴く場面を設定することで、さらに問題解決に迫る意見が出され、この条件だけでは問題解決することができないことに気付くことができた。クラス全体で、問題を通しお互いの情報を聴き合い（聴く）、問題解決に向かう姿が見られた。生徒一人一人の意見に耳を傾け（聴く）、大切にしていこうとする人間関係から、安心して自分の考えを発表することができたようである。

◎問題を解決する段階における「聴く」「話す」

問題解決場面におけるグループでの交流場面では、友達に積極的に自分の考えを説明しようとする生徒が多く見られた(聴く・話す)。これも学級活動で築かれた人間関係が影響しているものと考えられる。考えを表現する（話す）ことにより自分の考えが明確になったり、「聴く」ことにより新たな考えに気付くことができたり、その結果生徒が意欲的に問題に取り組むことができた。

【生徒の感想から】

◎かかわりから学ぶ

○自分と違う考え方もあったので、おもしろいと思った。また、こんな問題を解いてみたい。

○□さんの数学のパーフェクトな解答がすごかった。

○数学の時間に、□ちゃんに解き方を教えてもらって、その解き方を試してみた。

〔考察〕

ステップ１や３の活動から、自分と違う考えを認め、その考えを積極的に取り入れようとする姿が見られた。また、感想からお互いの考えを聴き合うことから、自分の学びとすることができたことも分かる。その後の授業でも、ステップ１～３で意欲的に取り組めた生徒は、その経験から友達と教え合ったり、意欲的に自分の考えを発表したりするようになった。

(2) 「振り返りカード」について

① 活動のねらい

学校生活を三つの観点で振り返る活動を通して、友達や自分のよさを意識することにより、人から学ぶことの意義やよさを知り、お互いに高め合う姿が日常的に見られるようにする。

② 活動の内容

「自分のよさを発揮する」「相手のよさを見つける」「お互いのよさを高める」の三つの観点により「振り返りカード」に一日の行動を記入する。

「自分のよさを発揮する」はステップ１での活動を振り返り、自分のよさを学校生活でどのように生かしていくかについて考えたことを実践する場ととらえ指導した。そして、誰もがよさをもち、そのよさを発揮することができることを確認した。「相手のよさを見つける」は、よさを発揮すれば､そのよさを見ている人がいることを伝えた。その時、人のよさを見てどのように思うかを､「人のふり見て我がふり直せ」の合い言葉から、自分もやってみようという気持ちがもてること、お互いのためになり「お互いのよさを高める」ことができることを説明した。この三つの観点がそれぞれ影響し合い、「かかわる、人から学ぶ、学び高め合う」という順に発展していくことを伝え、まずは「自分のよさを発揮する」ことから始めることを確認した。

③ 活動記録

〔考察〕

はじめはよさをなかなか見つけることができず、記入に時間がかかったが、ほとんどの生徒が三つの欄を埋めることができるようになった。また、「相手のよさを見つける」「お互いのよさを高める」の記入欄に個人名が書かれた内容については、「『○○君が理科の時間計算の仕方を教えてくれた』と書いてありました」などの様に、教師からその生徒の「振り返りカード」に記入しそのよさを伝えるようにした。友達のカードに自分の名前が書かれることにより、活動に対する意欲の高まりが見え始めた。自分の言動について単に教師に褒められる以上に、教師や友達から認められていることを知り、学習意欲の高まりや友達とかかわることのよさを感じることができたようである。このような経験から、友達から学ぼうとする意識が見えてきた。また、授業に対する意欲的な態度が見られたり、課題を通した好ましい人間関係が築かれたりしてきた。

【生徒の感想から（３観点）】

男子Ｂ　　目標　苦手科目にも積極的に取り組む

１日目

◎友達のよさを見つける
○○さんが数学の解き方を説明してくれました。
◎自分のよさを発揮する
なるべく手を挙げるようにした。
◎互いのよさを高める
社会の時間みんなが手を挙げていたので、自分も挙げることができました。
感想　今日は友達のよいところをたくさん見つけられました。僕もそれを参考に頑張ろうと思いました。

４日目

◎友達のよさを見つける
○○君がみんなが手を挙げていなくても自信をもって手を挙げていました。
◎自分のよさを発揮する
国語も英語も１回ずつ発言することができました。
◎互いのよさを高める
○○君が家で国語の暗唱の練習をしていると聞いたので、僕も家で練習しました。
感想　友達の頑張りに対抗して僕もがんばれた１日だったと思います。

Ⅵ　結果と考察

1　質問紙の結果と考察

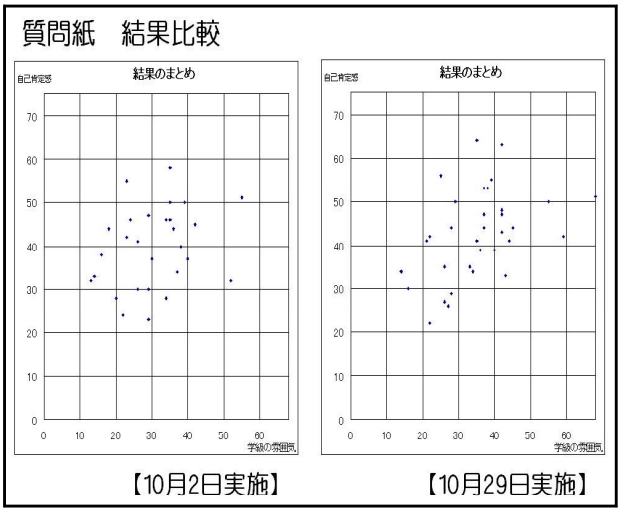


図7　質問紙･散布図の比較

質問紙の実践前と実践後の結果（図７）を比べてみると、自己肯定感、学級の雰囲気ともに変化

が見られた。この集計結果は散布図として一人一人が点（プロット）で表示される。縦軸は自己肯定感の高低を（０～75）、横軸は学級の雰囲気の認知を（０～64）表す。プロットの位置から個の実態を、プロットの分布から学級の実態を把握することができる。

プロットの分布を比べてみると、プロットが全体的に右側に移動したことが分かる。これは学級の雰囲気を以前よりよく感じている生徒が増えたことを示している。学級の雰囲気に関する得点も、実践前に比べ平均で3.61プラスになっている。これらのことから以前より、生徒にとって学級が居心地の良い場所になっていることが分かる。

自己肯定感については、大きな変化は見られなかったが、縦軸の50以上のプロットの数が５から９に増えている。また、得点は平均で2.08プラスになっている。これは実践活動が友達関係、自己肯定感などにプラスに働いたことが原因であると考えられる。その結果学級内の人間関係も良好になったと思われる。

また、質問項目を詳しく見ていくと次のような変化が見られた。

質問紙　項目ごとの結果比較

＊数字は実践前と実践後の人数の増減

（学級の雰囲気に関するアンケート） このクラスでは、	非常にそう思う わりにそう思う
なんでも話せる雰囲気があります	＋５
思いやりのある人が多いです	＋４
友だち同士についてのトラブルがよく起こります	－６
仲間はずれにされている友だちがいます	－６

（自己肯定感に関するアンケート）	あてはまる ややあてはまる
私は、つきあってみると、おもしろい人間です	＋７
私は同じ年ごろの人たちに人気があります	＋５

「なんでも話せる雰囲気」「思いやり」の項目が増え、「トラブル」「仲間はずれ」が減っている。これは、友達のよいところに目を向けようとする活動や、友達と協力して学習を進めようとする活動の実践による影響が大きいと考えられる。自己肯定感（自分）に関するアンケート結果については、「自分はおもしろい人間」「人気がある」の項目がプラスとなり、自分のよさに目を向けたり、自分に自信がもてるようになってきていることを表している。「振り返りカード」の「自分のよさを発揮する」「お互いのよさを高める」の記入に伴い、自分のよさを認めてもらうことにより、少しずつ自分に自信をもつと同時に友達との関係が良好になってきたことが原因であると考えられる。質問紙全体の数値には現れづらいが、自己肯定感の高まりが判断できる。自己肯定感は、交友関係、学級における自分の役割など多くの要因が影響し合い高められるものと考える。実践により学級の雰囲気がよくなってきていることから、これらの活動を継続的に実践していけば、人間関係が良好となり、自己肯定感もさらに高まっていくものと考えられる。

２　アンケート結果からの考察

【実践後の生徒の感想】

◎好ましい人間関係の育成

○私は友達のよさがとてもわかりました。自分がつらいときは友達に助けてもらい、友達がつらいときは、私が助けることができたと思います。それから「学級活動2」で私は、みんなで協力すれば必ず答えが出ることがわかりました。この授業を終えて、協力することと仲間の大切さがわかったと思います。

○友達のいいところがたくさん見つけられた。いいところを見つけることによってもっと仲良くなれた。

◎聴き合うかかわり

○あまり口に出さないようなことも書けたし、あまり話さない人と話せたからよかったと思う。人それぞれ違っているところがあっておもしろかった。

◎学び高め合う

○学校生活の中、少し考えて周りを見れば、いいことがいっぱいあることがわかりました。

【実践後の担任・各教科担当アンケートより】

◎学習意欲・態度

○話をよく聞ける生徒が増えた。

○挙手・発言が多くなった。

○今まで手を挙げなかった生徒が手を挙げるようになった。全体的にも積極的に手を挙げている。

◎学級の雰囲気

○雰囲気がよい。間違えても責められない。

◎学力

○単語テストの平均点が上がり学習に前向きになった。

友達のよさを認識したり友達との会話を楽しいと感じたりする感想から、対話的コミュニケーションが成立し、人間関係が良好となってきたことが感じられる。また、友達と協力することのよさや意義も感じたようである。人間関係の広がりから、クラス全体の雰囲気も変わってきている。担任・各教科担当のアンケートからは、人間関係の変化にともない、授業中の学習に対する意欲や態度にも変化が見られたことが分かる。学級の雰囲気が良好になり、間違えても責められないような人間関係ができたことから、意欲的に挙手をしたり、発言しようとしたりする姿が見られるように

なった。今後は、授業における学習意欲の向上により、学力の向上も期待できる。

Ⅶ　成果と課題

1　成果

◎　学び高め合う「好ましい人間関係」

実践を通して、生徒は人とのかかわりから学ぶことを意識し、積極的に友達とかかわろうとする態度が見られるようになった。その基盤となるのは「聴く」「話す」というスキルであるが、基本的な姿勢として、共感的な態度でかかわることがポイントとなった。共感的に影響し合うことにより、お互いに学び高め合うことができた(図８)。

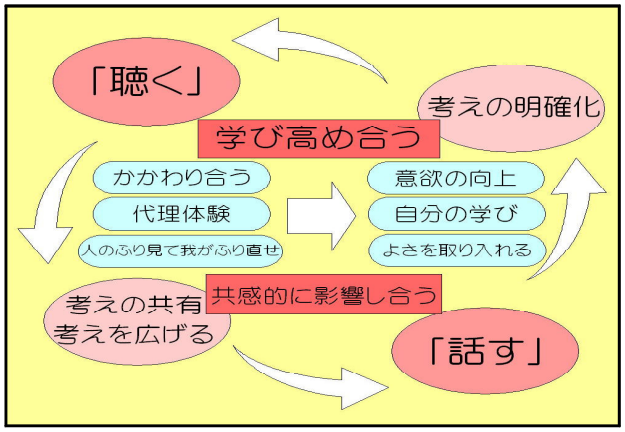


図８　学び高め合う「好ましい人間関係」

○　「聴く」「話す」のコミュニケーションについて

「聴く」「話す」というコミュニケーションの基本的な態度が身に付いてきた。そして、事実だけを基にしたかかわりから、さらに自分の必要とする目的に合った気持ちや考えを交流させるかかわり方もできるようになってきた。その結果、お互いを認め合おうとする人間関係が築かれ、学び高め合う学級風土へと変化していった。

○　授業における学びについて

実践を通して築いた聴き合うかかわり（人間関係）を利用し、授業における問題解決場面での考えの交流を活発にすることができた。学習の理解度に関係なく、自分の学習状況に合わせたかかわりをもつことにより、生徒一人一人の学びとすることができてきた。

○　学習意欲・学習態度の向上について

好ましい人間関係を築くことが、学習意欲を高めたり、積極的な学習態度を育てたりすることに効果的であることが明らかになった。また、学習意欲の高まりから、学力の向上も望めることが明らかになってきた。

2　課題

○　手だての工夫

多くの生徒は、事実を伝え合うことは容易にできても、自分の気持ちや考えを伝え合うことには抵抗を感じている。「授業に生かす」ための人間関係を深めていくためには、さらに生徒から自分の気持ちや考えを引き出すための手だてを工夫していく必要があると感じる。

○　継続的なかかわり

学級における生徒の人間関係、自己肯定感などは、その生徒の生活における様々な要因が影響し合っている。よって短期間に変化を期待することは難しい面もある。今回の実践期間は約1ヵ月であり、多くの成果も見られたが、このような実践を実態と目的に合わせ、年間数回行っていければより効果的であると感じる。

◇　その他の「ふれあいプログラム」について（人間関係形成能力育成プログラム）

実践は行うことができなかったが、学級の実態（課題）や目的に合わせた他の「ふれあいプログラム」も提言したい。いずれのプログラムもステップ１～４までと実践または実践に向けての活動を基本とし、ステップ４は日常での実践に近付けるための活動とする。学級の実態を分析し、実態に合わせた活動に内容を変更したり、活動の導入や事後指導を工夫したりすることによって、より成果が上がるものと考える。（別添資料参照）

〈参考文献〉

・渡辺　三枝子　著　『カウンセリング心理学』　ナカニシヤ出版(2002)
・山本　銀次　著　『エンカウンターによる“心の教育”』　東海大学出版社（2001）
・佐藤　学　著　『教育の方法』　放送大学教育振興会（2005）
・『カウンセリングを生かした授業づくり』　学事出版
・國分　康孝＋大友秀人　著　『授業に生かすカウンセリング』　誠信書房（2004）
・國分　康孝　監修　『エンカウンターで学級が変わる Part ３』　図書文化（2007）
・群馬県小学校・中学校教育研究会　中学校数学部会　報告書　研究資料№34（2009）